第15回 夏期福音特別集会（1）（鹿沢）

万象帰主――エペソ書第1章――（縮小版）（26）↓（10）39％

１９６８年８月23日
小池辰雄

エペソ書でパウロが、「空中を司どる権、そういった霊と私たちは戦う」と言う。「我は剣を投ぜんために来た」とキリストは言われた。天来の霊剣です。また、「火を投ぜんがために来た」と言われた。非常に真剣勝負である。本ものは小さな群れから始まる。「汝ら恐るるなかれ。父は汝らこの小さき群れに神の国を賜ろうとしている」と、ルカ伝にあるとおりです。パウロは第三次伝道で、このエペソに2年半ばかりいた。使徒行伝19章に、

「1**斯てアポロ、コリントに居りし時、パウロ東の地方を経てエペソに到り、或る弟子たちに逢いて、2『なんじら信者となりしとき聖霊を受けしか』と言いたれば、彼等いう『いな、我らは聖霊の有ることすら聞かず』3パウロ言う『されば何によりてバプテスマを受けしか』彼等いう『ヨハネのバプテスマなり』4パウロ言う『ヨハネは悔改のバプテスマを授けて己に後れて来るもの（即ちイエス）を信ずべきことを民に云えるなり』5彼等これを聞きて主イエスの名によりてバプテスマを受く。6パウロ手を彼らの上に按きしとき、聖霊その上に臨みたれば、彼ら異言を語り、かつ預言せり。7この人々は凡て十二人ほどなり。**」（使徒18・1～7）

と。パウロは御霊をもってはっきりと証のできる伝道者です。私たちは本当に使徒的信仰に立ち帰ろうではないか。使徒的信仰に立ち帰らないで何の福音であるかというわけです。

「10**斯すること二年の間なりしかば、アジヤに住む者は、ユダヤ人もギリシヤ人もみな主の言を聞けり。11而して神はパウロの手によりて尋常ならぬ能力ある業を行いたもう。12即ち人々かれの身より或は手拭あるいは前垂をとりて病める者に著くれば、病は去り悪霊は出でたり。**」（使徒19・10～12）

ある時は、毒蛇に咬まれても、彼は毒が回らなかったという。パウロも、ペテロも、ヨハネも、もの凄いものをいただいてましたが、彼らは決してそれを私していません。使徒たちの伝道は、聖霊と御言とは絶対に切り離すことができない。彼らの発する言葉は聖霊によって発せられている言葉である。実にキリスト自身が言われたではないですか、「私の言葉は霊だよ、生命だよ」と。

パウロは、力強い伝道をまず第三次伝道の初っぱなにこの小アジアのエペソで行った。エペソというのはギリシアとの交通の要衝の当時の第一流の都会で、文化的にまた宗教的に「アルテミス偶像神」との戦いがそこに大いにあった。エペソでもうひとつ、私たちが

すぐ思い出さなくてはならないのは、黙示録2章の一番先に七つの教会に当てたところの私信がある。1章19節に、

「19**されば汝が見しことと、今あることと、後に成らんとする事とを録せ。**20**即ち汝が見しところの我が右の手にある七つの星と七つの金の燈台との奥義なり。七つの星は七つの教会の使にして、七つの燈台は七つの教会なり。**」（黙示録1・19～20）

とある。これは使徒ヨハネがパトモスで示されたところの「顕示」「アポカリュプシス」（黙示録）の第一に出てくるのがこのエペソです。2章に、

「1**エペソに在る教会の使に書きおくれ。**

と。エペソ、スミルナ、ペルガモ、テアテラ、サルデス、フィラデルフィア、ラオデキヤという七つの教会が畳みかけて、3章の終りまでこの私信を受けるわけです。これはみんな小アジアにある教会です。その筆頭に、代表的なエペソの教会に何を言われたかというと、

**右の手に七つの星を持つ者、七つの金の燈台の間に歩むもの斯く言う、2われ汝の行為と労と忍耐とを知る。また汝が悪しき者を忍び得ざることと、自ら使徒と称えて使徒にあらぬ者どもを試みて、その虚偽なるを見あらわしたることを知る。3なんじは忍耐を保ち、我が名のために忍びて倦まざりき。4然れど我なんじに責むべき所あり、なんじは初の愛を離れたり。5然れば、なんじ何処より堕ちしかを思え、悔改めて初の行為をなせ、然らずしてもし悔改めずば、我なんじに到り、汝の燈台をその処より取除かん。6然れど汝に取るべき所あり、汝はニコライ宗の行為を憎む、我も之を憎むなり。7耳ある者は御霊の諸教会に言い給うことを聴くべし、勝を得る者には、われ神のパラダイスに在る生命の樹の実を食うことを許さん』」（黙示録2・1～7）

キリストの「初めの愛」を離れたら大変だ。「初めの愛」はまた終りの愛でもある。それを「終末的な愛」と言いたい。キリストの愛は、初めであると同時にこの終末的な愛である。

1神の御心によってキリスト・イエスの使徒とされたパウロから、エフェソにいる聖なる者たち、キリスト・イエスを信ずる人たちへ。2わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなたがたにあるように。

「キリスト」という言葉が非常に出てくる。なんとパウロという人はキリストに酔える人か。キリストは父なる神に酔っているひとである。旧約の預言者エレミヤは、「エホバの神の言に、酒に酔えるがごとく酔ってしまった」という。

3わたしたちの主イエス・キリストの父である神は、ほめたたえられますように。神は、わたしたちをキリストにおいて、天のあらゆる霊的な祝福で満たしてくださいました。

と。神さまはキリストによって私たちをどこで祝福するかというと、地かと思ったら、「天のあらゆる霊的な祝福で満たし」という。私たちのこの現実はなるほど地です。地ではあるが、天という彼岸をこの此岸にしてしまっている。もう天も地も一つになったように、「御意の天に成るごとく地にも成らせたまえ」と、天を地にくだしている。天と地が接している。いや実に天地の交わっている世界が、パウロのこの霊の現実です。私たちは地上を歩いているが、天界を歩いているようなひとである。

4 天地創造の前に、神はわたしたちを愛して、御自分の前で聖なる者、汚れのない者にしようと、キリストにおいてお選びになりました。

まぁなんという凄いことを言うだろうか。まだ生れないさきですよ、「天地創造の前に」というのだから。「生れぬ前に私は選ばれていた」なんてエレミヤも言った。どういうことでしょうか。それは考えたってわからない。我々が何かであるから神さまは選んだのではなくて、もう初めからそのように、神の側からは計画づけられている。キリストに選ばれて救われるというが、自分の救いというものは自分の側の何ものでもない。実は救われないことばかりだ、自分を見ると。この救われそうもない者が救われたというならば、どうしたってそれは、私が出てきてからでは、「出てきてから、さぁお前をどうしようか」なんていうのではない。それよりも先にもう私たちには端倪すべからざるところの神の御意が働いていたということです。そういうように、パウロははっきりと神の素晴らしい計画というものを言っている。創造から終末に至るまでの神の計画がある。しかし、それは物理の世界ではないから、せっかく神さまは選んでも、捨てるかもしれませんよ。我々は非常に平安であると同時に、また私たちは非常に危機的存在でもあるから。

5 イエス・キリストによって神の子にしようと、御心のままに前もってお定めになったのです。6 神がその愛する御子によって与えてくださった輝かしい恵みを、わたしたちがたたえるためです。7 わたしたちはこの御子において、その血によって贖われ、罪を赦されました。これは、神の豊かな恵みによるものです。

これが私たちの根底です。キリストの恵みの恵みたる一番どん底は何といっても、私たちを根底から――自我というのが「罪」なんだから――「罪」が本当にすっ飛ばされる。「心配は要らん。私はみんなこれを十字架で引き受けたから」と。この「十字架の贖罪」を観念で受けとっては、いつまでたってもダメです。時々、何か自分が「あっ失敗した。これはいけない」という時に深く十字架を冥想しなさい。十字架のキリストを祈りの対象としなくては。その時ごとに深くなってくる。私は何か躓いたり転んだりした時には、十字架で深められていく。贖いがいかに無条件にありがたいかを受けていく。これは自分でただ言い聞かせるのではない。十字架の贖いが深くなると、本当に自分が無くなる、私の無い「無私」の世界に入れられていく。

「あるがままでいい」と私は言います。あるがままでいいが、そのあるがままをどこへ持っていくかというと、十字架に持っていった、あるがままの姿なんです。十字架に持っていったところのあるがままの姿にこの「無私」の世界が開示してくる。これは真剣にやらなければダメです。いわゆる熱心ではない。もう「ざるを得ない」ところの事態です。この「ざるを得ない」事態に自分を投げかけていく。そうすると、キリストの十字架によって、あるがままでこの無私の世界に入れられていく。これが恵みの土台です。

[8]神はこの恵みをわたしたちの上にあふれさせ、すべての知恵と理解とを与えて、[9]秘められた計画をわたしたちに知らせてくださいました。これは、前もってキリストにおいてお決めになった神の御心によるものです。

パウロという人は非常に多角的にものを見て、ちゃんと中心をつかめている人です。「奥義」というのは「ミステリオン」という字です。一番神秘的な「秘められた計画」をわたしたちに知らせてくださいました」という。「秘められた計画」というのは、もしその内容を一言でいうならば、「キリスト」です。そして、この「贖罪と復活」の事態です。使徒たちの伝道の一番中心となっていたものは何かというと、実は復活のキリストなんです。「私たちはこの復活（よみがえり）のもの凄い霊的実在であるキリストの証人（あかしびと）だ」と。けれども、彼らがその証人として本当に立てたのは、ただ復活のキリストにでっくわしただけではまだダメです。その同じ質の生命が自分たちの中に入ってきてから、できたんです。それは何か。「聖霊」です。この聖霊が入ってきてから、初めて彼らは、甦りのキリストがいかに本ものであるか、事実中の事実であるかということの証人となった。

「証人」とは、言葉で証（あか）しすることが証人ではない。この「証人」という字は「殉教」という言葉と同じ字ですから、「殉道者」と言いたい。キリストという道に殉ずる者。我々はこの殉道者である。「私は教えなり」とはキリストは言わなかった。「我は道なり」と言われた。「道」というのは私たち東洋人には非常に親しい言葉です。キリストが「道」と言ったときに、もう東洋のいいものをグーッとキリストは言ってくださっている。誰が本当に、「我は道なり」と言いましたか。神の現象体でなければ、「我は道なり」なんてことは言えない。

十字架され、贖罪し、そして墓を蹴破って、キリストの義が勝った。「わが神、わが神、なんぞ我を棄てたまいし」と言われた。「この義は棄てられてはいかん」と。この義が現れたのは復活（よみがえり）の生命です。キリストの愛は十字架に現れたが、キリストの義は復活においてはっきりと現れた。神の義は、この復活においてキリストの実存の勝利がはっきりと証しせられた。キリストの実存は十字架では敗北ですよ。もの凄い敗北の姿をとった。しかしながら、「なぜ棄てたか。しかし、あなたは知ってます」と。でも、キリストは「なぜ、棄てたか」と言わなければならない。「乾坤（けんこん）を貫くところの神の義が倒れてたまるか」ということですよ、「なぜ、棄てたか」ということは。「この義が立つためには、どうぞ、あなたがその義を証明してください。それは私が本当に霊の生命として現れることではないですか」

と。神さまはそれをなさった。

この十字架においてもちろん神の「義と愛」は現れましたが、特にパウロは別なところで、「その復活（よみがえり）において神の義が現れた」と書いてある。キリストの義。そういうのがこの「御意の奥義」です。それを御意のままになさった。それが誰もわからん。即ち、

10 **こうして、時が満ちるに及んで、救いの業が完成され、あらゆるものが、頭であるキリストのもとに一つにまとめられます。天にあるものも地にあるものもキリストのもとに一つにまとめられるのです。**

神さまの「時」「カイロス」が満ちて、神の深い取り計らいによりまして、天上天下の一切のものはキリストにあって一つに帰する。主に帰する。今日ここに書いた、「万象帰主」というのはこの10節から取ったわけです。世界にいろいろな宗教があります。私たちのこのキリスト道というのは一切のものを包摂（ほうせつ）してしまう。全部それが偽りでない限り、みんな福音の傘下に入ってしまう。エペソ書は一切を包括（ほうかつ）している。この10節はなんと雄大な壮大な言葉か。天上天下一切のものが主に、キリストに帰する。どんな宗教も、どんな真理も、一番根底にはこのキリストを持った人でなければ、それが本当につかめない。

根底にそういう人間がいてもらわなければ、地上はどんなに「平和、平和」なんて言ったって、決して平和にはならない。これは聖書が言うとおり、いつか大カタストローフェ（破局）が来て、ひっくり返るでしょう。けれども、神の国は、そのような希望を持って生きる人によって立てられていくという約束がある。現状がどうひっくり返ろうが、我々は行くべき歩き方をしていく。その歩き方の根底は何であるか。それは地上を超越したものである。「神は超在し、神は貫在し、神は内在する」と、エペソ書に書いてある。パウロは、「三位一体の神さまをちゃんと言っている。パウロには、「神」と言おうが、「キリスト」と言おうが、「聖霊」と言おうが、離すことができない。それだけの凄い構造を実質的にしっかり捕まえている。

11 **キリストにおいてわたしたちは、御心のままにすべてのことを行われる方の御計画によって前もって定められ、約束されたものの相続者とされました。**
12 **それは、以前からキリストに希望を置いていたわたしたちが、神の栄光をたたえるためです。**13 **あなたがたもまた、キリストにおいて、真理の言葉、救いをもたらす福音を聞き、そして信じて、約束された聖霊で証印を押されたのです。**

今度は「聖霊」という言葉が出てきた。「聖霊で証印を押された」と。それもいいけれども、私たちは、「聖霊の人」となりましょう。聖霊の人とは、聖霊が主体となって、それを化している人です。「信じて」というのは、彼を現実に受けとって、「約束された」――既にキリストが、「お前たちにやるよ」と約束されたところの――その「聖霊で証印を押された」わけです。これは消えない。「キャラクター」(character) という字がそういう字です。「性格はついに変わらず」という。性格は変わらないけれども、その変わらない性格が――

パウロもなかなか我の強い男です――けれども、その我が今度は、自分の我ではなくなって、同じその強さが「キリストの我」になってしまった。キリストの我は決して消えない。キリストの我に変わってしまった。そこでは変質している。聖霊が来なければ、こういう変質はできない。にもかかわらず、まだあいかわらずの我というやつがいたりするよ。

[24]噫われ悩める人なるかな、この死の体より我を救わんものは誰ぞ。[25]我らの主イエス・キリストに頼りて神に感謝す（ロマ7・24～25）

と、パウロはローマ書7章で叫んでいる。どうにもならんと。けれども、「汝なるがゆえに」といって、今度は8章にきたら、もの凄いパウロです。7章と8章とは全然違ったパウロなんだが、そういう矛盾構造を持っている。しかし、この8章のパウロが勝つ。決定的な勝利をしている。これは天上でキリストの姿に化するパウロです。そういった意味における変質をしている。聖霊によって印せられていると、聖霊の人とは確かにそういうものです。

「あいつはしょうがない野郎だ。けれども、あそこに光っているものは本ものだ。その本ものはあいつのものではない。私はその本ものにぶつかって、『そうだ』と言っていく」というものを私たち一人びとりが持たなくては。「聖霊の人」とは、「あれは聖霊の人のくせに、あんなことをしやがって。あの聖霊はインチキだ」なんて、そうじゃない。これはパウロのローマ書7章と8章と同じように。「あれは聖霊の人なんだが、生れつきこういう癖があって仕方がない。しかし、あの戦いながら、聖霊の人としての彼が勝っていく。これは本当に神・キリストの救いである」というのが私たちの福音の気合です。「昔どうだったからどうだ」なんてことはキリストは仰らない。私たちはみんな五十歩百歩です。問題は、いつも常に新たに自分を乗り越えてこのキリストに向かっていくかということです。

「真実」という言葉も私は嫌だ。「あいつは少し真実が足りない」と、すぐそういうことを言う。「真実、真実」といって、人間の側のある真実を何ものかにすると、これがパリサイになる。「もう真実もヘッタクレもない」と、自分を投げ出す。あるがまま投げ出されて平伏す姿が、投げ出しが、もし「真実」という言葉でいうならば一番深い真実だと思う。人間はそれ自体が救われるようなら、真実も誠実もいいでしょう。キリストの霊で貫かれていくところの――「本もの」と言いますか、「真実」というよりも――この「本もの」が本当に人をうつ。それは私心のない世界ですから。自分というものを認めてない。「私は何もできない。私は何も教えない。私はちっとも善くはない」と、神の子キリストが言っている。これがキリストの本当の真実です。キリストの真というのは、神を「信」としているのがキリストの真です。「霊と真とをもって」というのは、このいただいた「信」が真です。

そうしたらば、本当に澄みきった空といいますか、晴天白日の心というのは、キリストにすっ飛ばされた心だ。そのものの姿を見るとガラクタさ。ガラクタであるが、よく見たら何もないという。そういうのがこのキリストの霊によって私たちが貫かれている事態です。パウロが、「この土の器に宝を持っている。この宝は何ものとも代えることのできない

キリストの霊である」と言う。

私たちは、この聖霊の人、中心に本当に聖霊を持っている人、いや実に中心に聖霊が来て聖霊化されている人にされる。皆さんも、この御霊の権威、力が来たら、もう本当に「あぁ、パウロさん、そうです。そのとおりです」と仰るわけです。これが、「聖霊にて印せられた」ということ。はっきりと聖霊の実質を持っている。聖霊を本当に内に帯びているわけです。

14 **この聖霊は、わたしたちが御国を受け継ぐための保証であり、こうして、わたしたちは贖われて神のものとなり、神の栄光をたたえることになるのです。**

聖霊が本当に来なければ、神の栄光は、キリストの栄光は現れない。我々がその体現者となるということは、体現しようなんて思わなくたって、自然に成っていく。キリストの霊と本当に一つになることです。キリストは神の懐の人であった。私たちはキリストの懐の人である。本当にキリストの霊を宿している者ということ。これは無条件にです。無条件の現実に直ちになる。それには本当に自分を投げ出さなくては。「投げ出せません」ではない。「もう十字架に投げ出されているではないですか」と言いたい。キリストは、「お前をもう十字架に私は受けとってしまっているではないか。なぜ『投げ出されない』なんて躊躇（ちゅうちょ）しているか。ちゃんともうここに私と一緒に投げ出されているじゃないか」と言う。パウロは「われキリストと共に十字架に投げ出されてあり。もはや私は生きていない。キリストの御霊わが内にありたもう。これをいかんせん。御霊のキリストが、十字架に投げだされていることに気がついた瞬間に来てしまった」とパウロは言った。自分がどうであろうと、そんな自分なんてものを見る余地がなくなってしまった。もうそこで御霊に包まれる。

18 **心の目を開いてくださるように。そして、神の招きによってどのような希望が与えられているか、聖なる者たちの受け継ぐものがどれほど豊かな栄光に輝いているか悟らせてくださるように。** 19 **また、わたしたち信仰者に対して絶大な働きをなさる神の力が、どれほど大きなものであるか、悟らせてくださるように。**

私たちは、「生れつきの才能がどうである、こうである。どれだけのことができる、できない」と思う。それはみんないわゆる「与えられたもの」だから仕方がない。私に絵を描かそうとしたって、絵は書けないんだ、いくら聖霊を受けたって。けれども、私たちの頂いているところの皆それぞれの特色がある。その特色、賜（たまわ）っているところの賜物（たまもの）は質的にもの凄いものになっていく。この聖霊を受けますと、私たちには何かしらんが質的に「無限無量」と言いたいようなものがある。もちろん、量的には有限でありますが、質的には無限性がある。「永遠の生命」というのはそういうこと。また、私たちの活力というものは、量的には限界があっても、質的には無限的なものを持っている。これは不死のひと、もう死なないひとなんです。聖霊は永遠の生命をもたらすところのものですから。平伏しては進んで行く。

20 **神は、この力をキリストに働かせて、キリストを死者の中から復活させ、**

天において御自分の右の座に着かせ、

キリストは死人の甦り（よみがえり）の「最先（いやさき）」と成りたもうた。キリストが最先（いやさき）に罪と死とに打ち勝って実証された。私たちは、二千年たとうがキリストに直結して、この甦りの実質を今もう現に持っている。私たちはいつか死ぬかしれない。みんな死ぬけれども、しかし、「私たちは死んでも死なない」とキリストがヨハネ伝で言っておられる。神さまがまだ私たちに御用があるとならば、どんな危機をも突破して救ってくださる。「よし、お前の使命は終った」というなら、私たちの思わない時にスッと向こうに行かなくてはならないでしょう。とにかく、我々はこの「死んでも死なない生命」を持っている。

第1章、2章あたりはまずこの「個」、個人ということ。あなた方は一人の個としての徹底的な生命の世界に入らなくてはいかん。自分自身の問題として、「私はもう本当にキリストでなければどうにもなりません。天上天下、汝のほかに慕うものなし」と。それだけの一切の相対的な世界を乗り越えたところのものを持っていなくては。

ヨハネ伝の一番終りで、ペテロが聞かれた。「ペテロよ、なんじ我を愛するか」と、三度まで聞かれた。ペテロは答えられない。あれは聖霊が来てなければ本当に答えられない。私たちは、「なんじ我を愛するか」と言われたときに、もうただ平伏して、わがうちなる聖霊が、「主さま！」と叫ぶ。キリストにキリストの霊が答えるように、「あなたを愛さないで誰を愛しますか。私の存在はどうかなってしまいます」というのが私たちの信仰告白です。信仰とは、キリストの愛をもって答えることのほか何ものでもない。このキリストの愛は霊の力ある愛ですから、何ものよりも力強い。全世界を背負っている愛だもの。

21 **すべての支配、権威、勢力、主権の上に置き、今の世ばかりでなく、来るべき世にも唱えられるあらゆる名の上に置かれました。**

このエペソ書というのはもの凄い超越的な絶対次元のキリストの権威を謳（うた）っている。ナザレのイエスに現れたこの天上にあるキリストは霊界の本当の王者です。人類はこれを嘲り、これに気がつかない。ただ私たちの存在の鍵をにぎり、本当に救いに引っくり返すところのキリストは、一切の次元を越えたところの素晴らしい王者であるという、この二つの面を持っている。「個」を本当に徹底的に救済し貫いてくるキリストが一切の次元を越えたところの霊界の王者である。すべてを支配しているところのもの。そういう壮大にして大能なる神・キリストと同質なものがこの小さな「個」の中に宿ってくるから、我々の気宇（きう）が壮大になる。何がどうなったって、世界がどう引っくり返ったって大丈夫だ。神の国はそんなことで揺るがない。私たちは決していわゆる道徳的実践そのものを問題にはしない。けれども、本当にキリストの霊の世界を持つものは、これは素晴らしい霊法の世界ですから、いわゆる道徳よりかもっと地道な歩き方ができるようになる。本当にそこにおいて喜びを感じ、そこにおいて本当に世界を――偉そうな事件よりも、人に隠れたひとつの事柄が――実は神の国を建設している。神の国を本当にうちに持っているものは、その結果いかん

にかかわらず、本当の実存が自然に展開してくる。平伏しの魂は地道にやっていく。霊的行為とは何か。雑巾掛けをすることなり。これが本当の世界です。

日本という国はもう救い難き状態です。単なる道徳もダメ。もうこの福音のほかにない。その福音が観念になってみたり、単なるパリサイ的ないわゆる道徳教になってみたり。とにかく、パウロが持っているこの健全な構造が、パウロの文字が、本当に霊の力と知恵と実存に満ちたものである。

22 **神はまた、すべてのものをキリストの足もとに従わせ、キリストをすべてのものの上にある頭として教会にお与えになりました。23 教会はキリストの体であり、すべてにおいてすべてを満たしている方の満ちておられる場です。**

藤井先生は「召団」という言葉を使ったが、やはりなかなかいい言葉だと私は思っている。「召されたる団体」です。私は「武蔵野福音集会」なんて言っているけれども、「会」の字はあまり好きではない。前の「幕屋」（武蔵野幕屋）で結構です。とにかく、召されたる団体、召団、教会、エクレシヤは彼の「体（からだ）」である。私たちは具体的な体を、幽霊じゃないから、みんな体を持つ。体を持っているが、「霊と肉」とが渾然（こんぜん）たるものです。体というのは要するに生命体ですよ。私たちの生命体の一番奥には、中心にはこの霊体というのがある。聖霊をいただけば、もう霊体の核がちゃんと出来ている。聖霊の周りにはちゃんと霊的な質が、具体的なものがあるに相違ない

イエスというひとが、「我を見しものは父を見しなり」と。こんなことは絶対に他の人には言えない。「私は何もできない。何も言えない。ちっとも善くない」と言うイエスが、「我を見しものは父を見しなり。我と父とは一つなり」と。これが充満ということです。このエペソ書に「一つ」という言葉がさんざん出てくる。私たちは、「我とキリストとは一つなり」ということになる。それを使徒たちはやった。ペテロが「我を見よ」と言ったでしょ。あの時の「我」はもはや単なる我でない。「キリストにある我、わがうちなるキリストを見よ」ということです。彼らはそんな分析した言い方はしない。もう質的に一つになって、御霊が充満して宿ってしまっているから、「我を見よ」と言う。「我を見よ。わがうちにあるものを汝に与う」と言って、跛者を立たせた。「あれはペテロやヨハネはできたけれども、私にはできない」なんてことはひとつもない。皆さんはいざという時にこれができる。私たちは何ものでもない。けれども本当に、「主さま！」と腸（はらわた）の底から呼んでごらん。そうしたら、その時にその次の言葉は、「我を見よ」になれるから。「あなたを信ずるとなったらば、もう私の中に来てくださって、どうにもならん」と。

一番本ものは一番簡単なんです。仏教だってそうでしょ。「南無阿弥陀仏」「南無妙法蓮華経」という、あの六字と七字。あれに浄土真宗の一切と日蓮宗の一切がかかっている。「主イエス・キリスト」に一切が福音はかかっている。「主よ！」と。キリストは「父よ！　アッバー」という一語に。もう言葉じゃないです、全身の響きです。全身の告白。呼んだ瞬間にもう

聖霊の世界、聖霊の響きです。「なんとそれはたやすい簡単なことだったか。何を私は今までゴタゴタしてたんだろう」と皆さんお思いになる。それでいい。簡単明瞭です。

キリストは万象に貫在しておられる。「石を上げてみろ。そこに我在り」なんていう、キリストの言葉が外典の中にある。ひとつの花にも神の栄光をご覧になる。キリストの霊は遍在している。キリストは天界に、霊界に超在して、「神の右に在る」という表現で言われていると同時に、一切を貫いている。ひとたびナザレのイエスとして具体的に現れたキリストは今度は復活体となって、昇天されたキリストは霊のキリストとして自由自在です。そこに一切を支配しているところのキリストの霊の充満がある。キリストの念、御霊の念というものはもの凄い力を持っている。「既に癒えたり」と言われたら、何キロか向こうの人がちゃんと治ってしまう。キリストの信というのはそういったもの凄い念である。それが本願である。キリストの霊は最高の霊ですから、何も恐いことはない。幽霊が出てこようが、何が出てこようが、ひとつも恐いことはない。「主さま！」と言って祈り入る。幽霊が出ても恐がらないで、「どうしましたか、あなたは？」と幽霊に言ってやってくださいよ。

私たちは常時、「ハッと気がついたらもう聖霊の中に、自分の中に聖霊がいた。ハッと気がついたら空気を吸っているのが分かった」というような具合に。平伏しの魂であれば、次の瞬間には直ちに、この御霊の世界は常にここに来ているわけです。この平伏しの魂が一番、権威を持つから不思議ですよ。いわゆる霊的に恵まれれば恵まれるほど平伏しにならなければダメです。キリストはもの凄く霊的に恵まれている方だが、いよいよ平伏しであった。「充満」ということと「空っぽ」ということが同じ。「自分が充満しよう」なんて思ったり、「私はもう充満しているからいい」なんて思ったらいかん。もう平伏しです。平伏しの空っぽ。「空っぽだと思ったら満ちていた」なんて。これは説明になりませんけれども、体験していくよりか仕方がない。福音だけは頭で分かろうなんて思ったらとんでもない。

この第1章は徹底的にもの凄いキリストの世界、壮大なものです。「個」に向かってもの凄い充満を迫ってきている。その個の中にその充満の迫りがくると、これがグーッと広がって見えてくる。この充実、聖霊の充実、キリストの満ち満ちているところの事態です。エペソ書の凄さとは、この聖霊はそういった壮大なものを持ち得るところのものです。そういうようなものを本当に一人の乙女でも持ち得る。これは聖霊が一切に充満し、一切を支配し、また本当に小さなところにしっかりと動いていくようなキリストの霊。このキリストの霊を私たちがいただいて、万象がすべて主に帰する。すべての現象はこの主に帰して、主によって導かれ、主に帰していくところの壮大な構造を第1章でうたっている。「その力強い充満した神の大能がこの小さなものの中に、質的には無限の質をもって働いてください」と、パウロが祈っている。壮大さと、それから小さなものにおける質的な無限さというものと、両方持ったことを言っているわけです。